

◇ 目次

1. 観光文化研究センター報告	観光文化研究センター センター長 佐々木豊志	…1
2. SDGs 研究センター報告	SDGs 研究センター長 藤 公晴	…4
3. NHK 青森と連携し「参院選プロジェクト」展開		
	社会学部（キャリア特別実習コーディネーター） 櫛引 素夫	…6
4. 太宰治の『津軽』外ヶ浜ルートの可能性	社会学部 金 二城	…9
5. 「赤根沢の赤岩」についての聞き取り調査報告 ～地域の遺産の保存と活用のために		
	SDGs 研究センター・客員教授 竹内 健悟	…9
▽総研日誌		…14
▽編集後記		…14

1. 観光文化研究センター報告

観光文化研究センターは、昨年度まで報告してきた通り、これまでは「観光産業の人材育成」「体験型観光商品コンテンツ開発」等に取り組んできました。この事業は、観光庁及び環境省との連携・委託・助成事業でした。さらに一昨年度からは、日本たばこ産業の「SDGs 貢献プロジェクト助成」、青森県国際観光戦略局の「イグルーのリスクを担保するための調査業務」など、持続可能な観光を創出することを基軸にした様々な取り組みを進めてきました。

今回の報告は、すでに採択を受けている「西北アウトドア調査 PR 業務」と申請準備中の「環境省：自然体験推進計画及び国立公園資源整備事業費補助金（国立公園等の自然を活用した滞在型観光コンテンツ創出事業）」についての報告です。

（1）西北アウトドア調査 PR 業務

今年度は、青森県西北地域県民局から「西北アウトドア調査 PR 業務」の採択を受け進めることになりました＝図 1・2。

この事業は、西北地域県民局管内 7 市町のキャンプ場の活性化のための調査及びコンテンツの提案と PR 業務として、主に次の 7 つの業務を行います。①～④までは青森大学観光文化研究センターが実施し、⑤～⑥は、青森大学から（株）ソトレシピへ再委託して実施します。

①域内の資源調査業務：西北地域 7 市町にあるキャンプ場の現状を把握し、周辺の観光資源（施設、人的資源、自然・文化資源）の調査を行う。調査にあたっては、観光文化研究センターの他、SDGs 研究センター、国際交流センターの藤先生、金先生の協力も得ながら多角的な視点で進める。

②コンテンツ提案・実証業務：キャンプ場で展開可能なコンテンツの提案。今回はアクティブな体験コンテン

観光文化研究センター センター長 佐々木豊志

ツではなく、グリーンシーズンのキャンプ場内で展開が可能な「クラフト」に焦点を当てます。

第 1 回コンテンツ提案・実証業務は、7 月 25 日～27 日に、つがる地球村を中心に実施予定。

多くのキャンプ場が閉鎖しているホワイトシーズンは、冬季でも営業に取り組むキャンプ場へ「イグルー」の展開提案をおこないます。

③モニターツアーの実施：コンテンツ提案を元に、モニターツアー（10 月に予定）を実施し有識者に実際に体験してもらい、意見をいただき実効性へ向けて検証を行います。

④アウトドア PR 写真素材収集：1 年を通して、今後の PR に使用する写真の素材を収集します。四季折々の自然、コンテンツ体験の様子など、コンテンツ提案・実証業務、モニターツアーなど、今業務の全ての取り組みを撮影します。

⑤キャンプレシピの提案：地域の食材を掘り起こし、キャンプ場周辺の産直など食材提供業者と連携した「キャンプ飯のレシピ提案」。キャンプ飯レシピに特化した web 運営をし、20 万人のフォロワーを有する「ソトレシピ」に委託し実施する。

⑥キャンプ飯の動画作成・PR 情報発信：域内のキャンプ場で提案したレシピで実際に作る「キャンプ飯」動画撮影をして WEB で情報発信を行う。

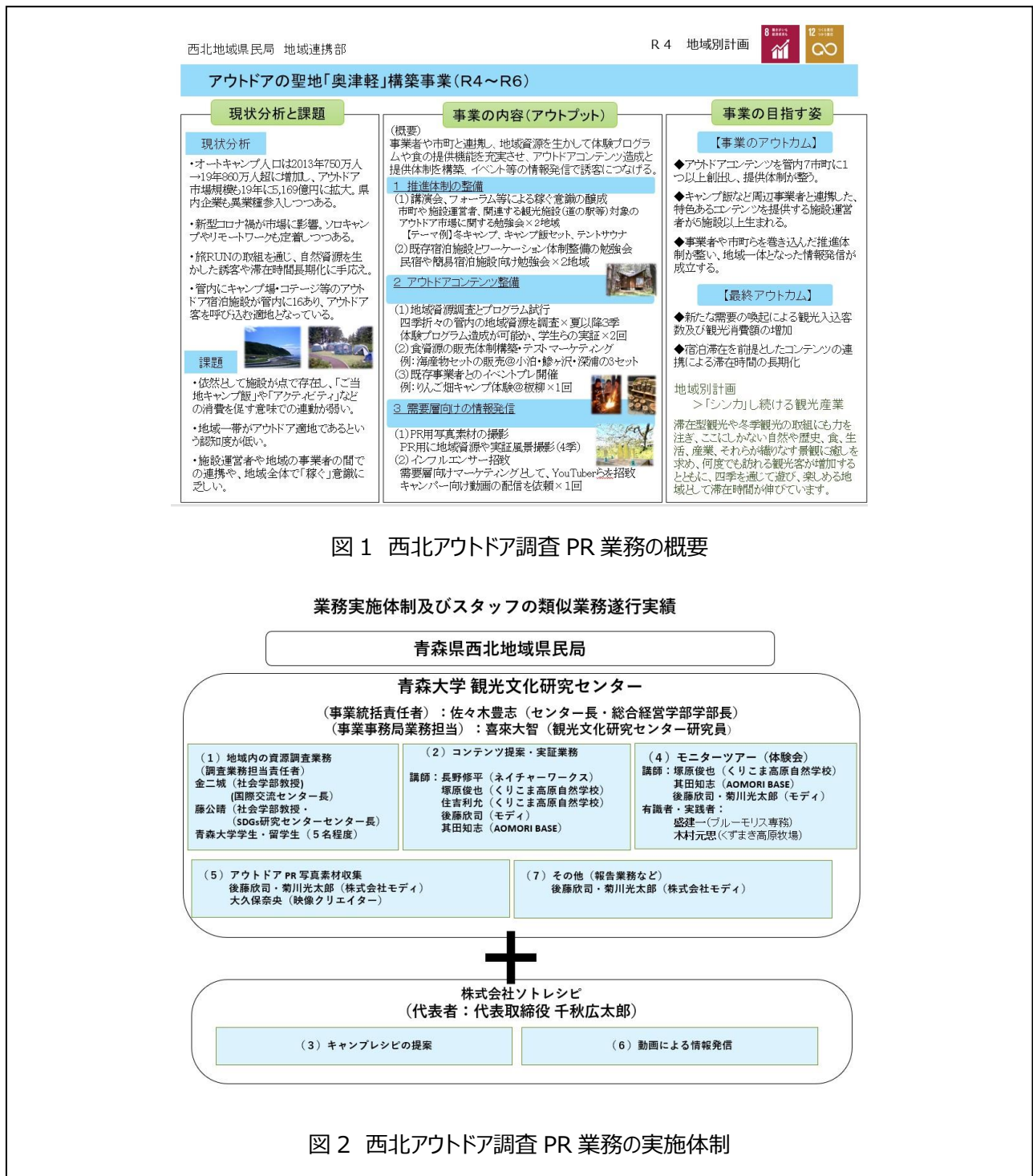
（2）自然体験推進計画及び国立公園資源整備事業費補助金（国立公園等の自然を活用した滞在型観光コンテンツ創出事業）

環境省の事業は、これまで国定・国立公園の保護が大きな柱でしたが、近年は、自然環境豊かな国立公園に多くの国民が訪れるように、環境省の取り組みが「保護」と「活用」の両輪で進められています。この流れから、今年度 4 月に施行された「公園法一部改正」に伴い、国立・国定公園の域内で体験型コンテンツを進

めるために、地域で「自然体験活動推進計画」の策定が求められています。今回申請準備をしているこの事業は、十和田八幡平国立公園の域内にある八甲田を中心とする、青森の「自然体験活動推進計画」の策定を目指す取り組みになります。この事業は、地方自治体、地元観光協会、観光事業者などと連携をし協議会を発足させ、その協議会を中心に「自然体験活動推進

計画」を策定するための準備の事業になります＝図3。

先日、青森市経済部観光課、青森観光コンベンション協会、青森商工会議所に説明にあげり連携の承諾を受けました。そのほかの関係団体、関係者に説明を行い、事業申請します。今後の経緯は次号で報告いたします。



(2) 国立公園等の自然を活用した滞在型観光コンテンツ創出事業

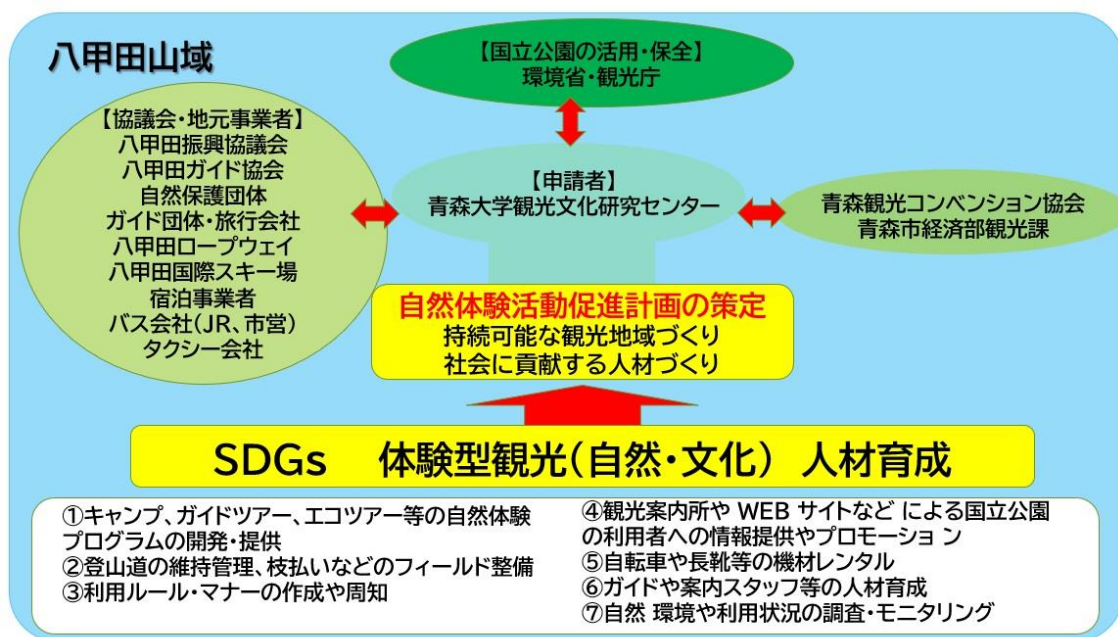


図 3 国立公園等の自然を活用した滞在型観光コンテンツ創出事業の申請体制概要図

2. SDGs 研究センター報告

SDGs 研究センター長 藤 公晴

1.2022 年度 SDGs 研究センターの事業展開と着眼点

設立 4 年目となる 2022 年度の本センターの事業については、これまでの取り組みの継続と発展、多様化を進めながら、新たな取り組みにも着手し、「地域の自然の再評価」と「教育の質向上」「地域貢献」の 3 側面を有する各種プロジェクトを展開しながら、青森大学の魅力向上に努める計画である。

これまでの取り組みについては、総研だより第 3 巻第 3 号で「現在の SDGs 関連の科目・プログラム」の見取り図と SDGs のウェディングケーキ・モデルを紹介し、第 4 号で次のように述べた。

これまでの本学の教職員が築いてきた地域貢献のノウハウと自治体や企業、事業者、個人などのネットワークを活かして、現場に接近した学びの機会をよりきめ細やかにすることは、地域社会の諸課題を垣間見るだけでなく、初期成人期の若者の自己認識や対人関係力などの暗黙知を育む機会でもある。とくに子どもや若者の体験不足が大きな課題として認識されているがゆえ、こうした取り組みをさらに進めていきたい。

SDGs や脱炭素といった、グローバルで領域横断型のコンセプトのもと、社会システムの抜本的な見直しが各方面で求められる中、青森大学のような学士課程を軸にした地方の小規模の高等教育機関にとって、学習

者と地域社会の変容を並行で進める Transformative Learning（変容学習）の考え方と取り組み、その対処能力の向上は重要であることはあらためて強調するまでもない。とりわけ学習者の変容については、本学でもルーブリックやアクティブラーニングの運用による学修成果の可視化を進めてきた。その一方、地域社会の変容については、この数年間十分検討できなかったため、学内外の関係者、協力者と協議を重ねながら進めていく。

上記の事業全般にかかる考え方をもとに、「学問のすすめ」などこれまで進めてきた各ゼミや講義等の正課教育、サークルなどの正課外教育、そして薬学部の高次学連携による県産ものづくりプロジェクトを含む青森山田 SDGs 共同教育プログラムなどを、青森県環境政策課委託「大学による令和 4 年度 SDGs の考え方を取り入れた環境人材育成事業」や青森学術文化振興財団助成「青い森におけるローカル SDGs のシナリオ創出に関する調査研究①事業」を通して着手し始めている。

初年度必須科目の「学問のすすめ」における「ゴミから探る社会の未来像」プログラムについては昨年度と同様、学内外における実際の収集活動を含む廃棄物への関わりについて、合計 7 回分の講義を充当して実施した。このプログラムには、SDGs の紹介と関連づけはもとより、個々のキャリア観の形成や、コミュニケーションや問題分析、課題解決といった非認知能力の向上を関連づけて実施した。4 月 23 日（土）は、幸畑地区、スチューデントプラザ周辺、大学キャンパス、平内町夏泊半島久慈の浜の 4 箇所に分かれて、廃棄物収集のフィールドワークを実施した。この成果物として、受講生各自が写真付きレポートを作成し、希望者が大学祭で展示する予定である。

この学習効果を含む評価分析については、別途詳しく実施・報告する機会を設けるが、本講義担当教員 4 名（沼田 郷先生、宮川 愛子先生、黒田 茂先生、

小松 一先生）を含む学園教職員約 10 名そして幸畑まちづくり協議会、青森山田サービス、幸畑ヒルズイノベーション、平内町役場（町民課、企画政策課）、平内町漁業協同組合、東田沢町会、Hiranai Project Rebirth、Blue Peace、ウッドラック、株式会社高橋など多くの関係者の支援と協力がなければ、このような試みは実施できなかった。この場を借りて深くお礼を申し上げたい。

以下に今年度の勉強会や新たな取り組みの概要を整理する。

勉強会

ご存知の方々も多いと思うが、昨年度、農林水産省が SDGs を取り巻く国内外の情勢を踏まえつつ、食料・農林水産業の生産力向上と持続性の両立をイノベーションで実現する「みどりの食料システム戦略」を策定し、2050 年までに「農林水産業の CO2 排出量ゼロ化」「化学農薬の使用量 50%削減」「化学肥料の使用量 30%削減」「有機農業を 100 万ヘクタール（全耕地の 25%）に拡大」という野心的な数値目標を示した。その実現に向けて、今年 4 月「環境と調和のとれた食料システムの確立のための環境負荷低減事業活動の促進等に関する法律（通称：みどりの食料システム法）」が成立し、従来は生産現場から食卓までの個別に進めてきたさまざまな施策や取り組みを関連づけ、連動させながら、新たな社会の仕組みづくりに向けに各自自治体や関係機関が動き始めた。

今年度の勉強会は、青森におけるみどりの食料システムの普及推進に係る現地調査やワークショップを実施しながら、大学など教育機関の役割をより明確にすることを目的に実施し始めた。ただし、昨年度の「火の文明学」シリーズ勉強会と異なり、いわゆる有識者による専門性の高い知識を学生や市民に提供する形式に加えて、現在各地方、各セクターにおいて創意工夫で展開している個人や組織の実践に着目し、それらが抱える諸課題や教訓、可能性などの理解を通して、現場の

点と点を結びつけるような勉強会の展開をイメージしている。

そのキックオフの勉強会として、秋田県立大学教授の谷口吉光氏（日本有機農業学会会長）を迎えて、「みどりの食料システム戦略を生かして「食と農の自治組織」を作ろう：オーガニック給食を手がかりに」を以下の通り実施した。谷口氏は上記法案成立前のさる3月24日、「みどりの食料システム戦略」に関する衆議院農林水産委員会での参考人質疑に出席し、今回のテーマに関連する意見陳述を行った。

日時：6月5日（日）10:00～

場所：青森大学 340 教室 と オンライン形式

参加者数：38 名（最多入室時）

以下のリンクと QR コードは勉強会後に実施した参加者アンケートの結果である。



https://www.surveymonkey.com/results/SM-zijBSpKyjQhn2VEV6bp_2BrA_3D_3D/

第2回勉強会は、7月22日（金）午後、地元幸畑で長く青森の自然を生かした保育に取り組むまきば保育園を会場にして、同園の食事と食育、材料の調達、保護者を含む地域の生産者等との関係などについて、同園長の山口 満先生から講話をいただく予定である。なお、このまきば保育園での勉強会は、次に紹介する青森大学 自然体験・幼児教育研究会の勉強会



と関連づけて実施する。

青森大学 自然体験・幼児教育研究会（仮）

さる6月7日（火）夕方、青森大学3号館附属総合研究所会議スペースで、青森大学、青森山田学園および系列の幼保育園の園長と教員や法人本部スタッフ、大学教職員など12名の参加のもと、第1回目の青森大学自然体験・幼児教育研究会（仮）を実施した。話題提供は、総合経営学部長で観光文化研究センター長の佐々木 豊志先生による「幼児期の自然体験の意義と森のようちえんの取り組み（仮）」。

参加した教職員からはより積極的な自然体験や野外教育の導入に向けた教職員の育成、能力向上の必要性が挙げられた。

本研究会については、大学の教育の質向上と青森山田学園の幼稚園の活性化を関連づけながら、青森山田学園において、自然体験活動を軸にした子育て・保育、乳児・幼少期教育の普及促進と、それにかかる指導者養成・安全講座、調査研究、関係者間の情報交換を推進し、青森山田学園内外の幼児教育の発展に寄与することを目的に着手し始めた。ただ、こうした学園全体の教育方針にも関係することから、大学を母体を実施するより法人本部主導で行う方が良いのではといった意見もあるが、上述した今年度の「ローカルSDGs のシナリオ創出に関する調査研究①事業」の人づくり分野に関連していることから、まずは準備勉強会という形で実施した。



世界遺産の人・仕組みづくり調査・ワークショップ

本プロジェクトは、2023 年の世界自然遺産登録 30 周年に向けて、同時期に登録を受けた鹿児島県屋久島と白神山地の関係者を迎え、活性化に資する人材育成と仕組みづくりの現状と課題について、両地域の関係者の交流を勉強会と調査の実施を通して、地域の大学など教育機関の役割を整理する。10 月中旬に屋久島で公認ガイドとして活躍する田中 俊三氏らと青森秋田両県のガイド関係者を招いた交流会を

鱒ヶ沢町熊の湯温泉で実施する計画である。

今後の予定

7/22 SDGs 研究センター主催 第 2 回勉強会
(会場：まきば保育園)

7/23 環境省東北地方環境事務所・気候変動適応東北広域協議会主催「高校生・大学生向け気候変動適応セミナー」の実施協力 (会場：青森物産館アスパム 5F あすなる & オンラインのハイブリッド開催)

3. NHK 青森と連携し「参院選プロジェクト」展開

社会学部 (キャリア特別実習コーディネーター) 櫛引 素夫

▽「Z 世代」の社会観・政治観をさぐる

7 月 10 日投開票される参議院議員選挙に向け、キャリア特別実習 (総合経営学部・社会学部・ソフトウェア情報学部、1~4 年の合同授業) において、NHK 青森と連携した「参院選プロジェクト」を展開している。参院選の投票率が恒常的に 5 割を切る中、「Z 世代」の社会観や政治観、投票行動を理解する上で貴重なデータが得られており、今後の社会のありようについて、学生とともに考える重要な機会ともなっている。

プロジェクトは、社会学部の佐藤淳教授を介した NHK 青森からの要請により、5 月にスタートした。柱となるのは「青森大学生が考案した、青森大学生を対

象としたアンケート」である。このほか、県内の他大学生とのオンライン対談などが行われた。NHK 青森は吉永智哉、早瀬翔の両記者が中心となり、検討と取材を進めた。

本稿は、これらの概要について速報的に報告する。アンケート結果の詳細や考察は、9 月末に刊行予定の青森大学附属総合研究所紀要に投稿予定である。また、次号の「総研だより」にも続報を投稿予定である。

▽授業サイドの目的

NHK 青森からの要請は「参院選に対する若者の思い・視点を探り、それを報道に反映させたい」という趣旨だった。キャリア特別実習のチームとして、その方向性を掘り下げ、授業における取り組みに際しては、次のような目的を設定した。

- ・主権者教育の一環として、本学学生に「有権者」「当事者」としての意識を涵養する
- ・青森大学生の問題意識を NHK 青森の選挙報道に反映させることで、適切な選挙報道や世論形成に貢献する
- ・本学のイメージアップに貢献する



学生が制作したポスター (左) とチラシ

学生に呼びかけたところ、社会・ソフトウェア情報学部の1～4年生6人が名乗りを上げ、コメンターとして活動することになった。早速、週1回の定例ミーティングに加え、キャリア特別実習の授業における学生同士の対話、さらには Teams での意見・情報交換を重ねて、非常に速いペースで作業を進めた。NHK 青森からは定例ミーティングやキャリア特別実習の授業を再三、記者とテレビクルーが取材し、学生たちと意見を交わしながら、彼らの取り組みと表情を記録していった。

アンケート結果の概要と学生たちの分析は6月20日夕、NHK 青森の「あっぷるワイド」で放映された。また、特集とその文字おこしは、NHK 青森のサイトに掲載されている

・Web 記事

<https://www.nhk.or.jp/aomori-blog2/3010/470181.html>

・特集サイト

<https://www.nhk.or.jp/senkyo/database/sangiin/02/skh50746.html>

▽アンケートの概要

学生と NHK 記者、筆者が検討を重ねて質問項目を設定し、6月1日～8日にかけてアンケートを実施した。調査対象は青森・むつキャンパスの学生約1000人と設定し、Microsoft Forms で回答を収集した。学生課の協力を得て、対象学生にメールで協力を依



学生によるチラシ配布



NHK 記者（左端）と学生による分析

頼した。また、学生がチラシやポスターを作成して張り出したほか、各学部において授業で実施していただいたり、学内で直接、チラシを配布したりした。

最終的に297件の回答が集まり、単純な回収率は3割弱となった。ただ、チラシの配布や授業でのお願いができなかった学生が相当数いると考えられ、チラシを手にした学生の実質的な回収率はもっと高いと見込まれる。回収数は社会学部が、回収率はソフトウェア情報学部が最多だった。

回答数は特段の目標を設定していなかったが、日頃、学生は政治や選挙への関心の低さが指摘されるだけに、実施前は無意識のうちに「100～200件も集まれば…」と考えていた。約300件という声が集まったことは想定外の手応えと言えた。

なお、「注目している政策」の選択肢で、「エネルギー政策」が漏れていることに、アンケート開始直後に気づくというミスがあった。「その他」としてエネルギー政策を挙げている回答者もあり、原子力施設が集中立地する青森県の選挙に関するアンケートとして、大きな反省点となった。

▽アンケート結果の概要

以下、主な項目を列挙する。

【選挙や政治への関心度】（5段階評価）

- ・5段階（1が低い、5が高い）で尋ねたところ、平均値は2.78と、ほぼイメージの範囲に収まった。
- ・内訳は「1」18.5%、「2」18.2%、「3」38.0%、

「4」17.8%、「5」7.5%だった。

【投票経験】

・「投票に行ったことがある」54.1%、「選挙があったけれど、投票に行ったことがない」32.5%、「18歳になってから選挙がなく、投票に行ったことがない」13.4%だった。後述の質問で「今回の参院選の投票に行く」と答えた回答者は、「投票に行ったことがある」を下回っている。

【今回の参院選の投票に行くか】

・「行く」38.7%、「行きたいけれど行けない（住民票の事情など）」20.2%、「行かない」41.1%と、「投票に行かない」という回答が「行く」を上回った。

【投票に行く理由】（3つまで）

・複数回答で尋ねたところ、「行く理由」のトップは「国民としての権利を行使したい」で、回答者全体の46.5%が理由に挙げた。次いで「社会勉強になる」43.0%、さらに20%を超えたのは「自分の考えに合った政策を実現したい」27.3%、「投票率アップに貢献したい」26.7%だった。

【投票に行かない理由】（3つまで）

・同じく複数回答で尋ねたところ、「行かない理由」のトップは「忙しい」45.8%、「政治に興味がない」45.0%、さらに20%を超えたのは「各党・候補の政策を知らない」26.7%、「自分が投票に行っても何も変わらない」25.0%、「若者向けの政策が伝わってこない」24.2%だった。

【参院選の投票で重視する政策やポイント】

（投票に行く・行きたい人、3つまで）

・「投票に行く」、または「投票に行きたいけれど行けない」人に、重視する政策やポイントを尋ねたところ、20%を超えたのは「就職・賃金・雇用」65.7%、「地方や地域への支援」48.3%、「教育に関する政策」（奨学金制度の改善など）47.1%、「新型コロナウイルス感染症対応」22.7%、「世界情勢」21.5%だった。「ジェンダー平等」、「安全保障・憲法改正」、「政治とカネ」は20%に届かなかった。

【参院選で気になる政策やポイント】

（投票に行かない人、3つまで）

・「投票に行かない人」を対象に、同じく重視する政策やポイントを尋ねたところ、20%を超えたのは「就職・賃金・雇用」59.2%、「新型コロナウイルス感染症対応」38.3%、「教育に関する政策」（奨学金制度の改善など）30.0%、「政治とカネ」26.7%、「地方や地域への支援」21.7%だった。「ジェンダー平等」、「世界情勢」、「安全保障・憲法改正」は20%に届かなかった。

★「投票に行く／行きたい」学生と「行かない」学生を比較すると、トップの「就職・賃金・雇用」を除き、回答傾向が大きく異なっている。

【あなたが選挙に行くとき世の中は変わると思うか】

・二択で尋ねたところ、「変わる」45.5%、「変わらない」54.5%だった。

【政治や選挙・政策に関する情報や知識を得る際、参考にしているもの】（3つまで）

・複数選択で尋ねたところ、最多は「テレビ」84.2%、次いで「SNS」74.3%、「ニュースサイト・アプリなど」47.9%だった。新聞は29.1%と意外に健闘している。街頭演説や政党チラシ、サイト・アカウントは少ない。

【家族や身近な大人が投票に出かけるのをよく見かけたか】

・「よく見かけた」が65.4%、「あまり見かけない」が34.6%と、3人に1人は「投票に行く大人」を見ていない。

【今の選挙や投票の仕組みは、若者に分かりやすいと思うか】（5段階評価）

・5段階（1が低い、5が高い）で尋ねたところ、平均値は2.47と、ほぼイメージの範囲に収まった。
・内訳は「1」24.0%、「2」29.5%、「3」29.8%、「4」9.6%、「5」7.2%だった。

【家族と政治や選挙について話すことはあるか】

・「ある」33.9%、「ない」66.1%と、3人に1人しか話していない。

【友人と政治や選挙について話すことはあるか】

・「ある」11.3%、「ない」88.7%と、10人に1人強しか話していない。

▽結果の考察

回答を検討した学生たちの第一印象は「中身が濃い」だった。「関心がない」、「投票に行かない」、と回答している若者たちも、記述項目を懸命に埋めている様子がかがえた。

クロス集計の結果によると、さらに興味深い姿が浮かび上がる。

「投票に行かない」と答えた学生が、必ずしも選挙や政治に興味がない訳ではなく、それでも「諦め」が投票から足を遠のかせている。裏腹に、「投票に行く」と答えている学生が、「自分の1票で社会を変えられる」と必ずしも信じておらず、それでも投票に出向こうとしている、等々…。

「若者＝政治に無関心＝現状への諦め＝投票しない」というステロタイプな見立てと論じ方では、若者たちの心に届く対策を講じようがないことだけは間違いない。

コアメンバーとして活動した学生からは「テーマは選挙に限らず、年に1度ぐらい、このような全学生対象のアンケートを実施してもよいのでは」という声も上がった。そのひとりで、今回の取り組みによってかけがえのない知見が得られたことをあらためて確認するとともに、外部からの働きかけがなければ、学生たちの生の声を集めようとしなかったであろう自分を恥じた。

ともあれ、一連の取り組みは、大きな成果をもたらしつつある。

・アンケートの実施によって、多くの学生が参院選に



キャリア特別実習での活動報告

関心を向けるようになった

- ・多くの学生が、「隣の席に座っている学生たち」の活動を目の当たりにして、刺激を受けた
- ・ある日、舞い込んできたオファーからプロジェクトが立ち上がり、NHK記者が再三、教室を訪れて、取材者としての肉声を伝えながら、「学生とともにアンケートを作り上げ、実行する」プロセスを履修者が目撃した
- ・自分たちの声がNHK青森でオンエアされ、ネットでも公開された

参院選プロジェクトはもちろん、アンケート実施で終わる訳ではなく、ここから佳境を迎える。今後、参院選の投開票を経て、学生たちが選挙戦とその帰結にどのような考えや感想を抱いたか、また、関心度や視点がどう変わったか。これらを検証して、次の「総研だより」、さらには総研紀要への投稿としてまとめていく。

4. 太宰治の『津軽』外ヶ浜ルートの可能性

社会学部 金 二城

▽なぜ『津軽』外ヶ浜ルート？

筆者は2022年6月19日、太宰治の津軽巡礼の一部である外ヶ浜ルートを廻ってみる事にした。偶然にもこの日は太宰治の生まれた日でもありご命日でもあった。青森を出発して、蟹田から津軽半島の最北端である竜飛崎まで辿るコースだ。今回の目的は『津軽』の外ヶ浜ルートの可能性を探ってみるためであった。『津軽』は太宰治が或る出版社から頼まれて、生まれ育った津軽地域の隅々まで旅した内容を小説化した作品である。歴史的な事実など少し難しい所もあるが、紀行文に近いこの小説は津軽がどういう地域なのかだけでなく、太宰治の人柄も見えてくる作品である。

5月のはじめごろ、筆者は太宰治の『津軽』に出てくる蟹田から竜飛崎までのルートを廻ってみたくて、いろいろ検索してみても詳しい情報を出に入れる事が出来なかった。太宰治が生まれ育った金木町の周囲にはいくつかのルートがあったが、外ヶ浜に関するルートはなかなか見つからなかった。そのため筆者は本をもう一度読み直してみ、筆者なりの『津軽』外ヶ浜ルートを構想してみた。それは、蟹田—観欄山—今別—本覚寺—三厩—義経寺—(旧)奥谷旅館—竜飛崎を辿るルートだった。先月、実際にこのルートを一日で廻ってみたら『津軽』の外ヶ浜でのストーリーも実感できたし、外ヶ浜の素晴らしい自然、文化にも出会えた。しかし、『津軽』を活かした跡地も少なかったし、ルートを貫くストーリーも見えなかったし、いくつかの町は過疎化で元気がないように見えた。『津軽』外ヶ浜ルートがあれば、太宰治の巡礼もできるし、魅力的な観光資源で地域活性化にもつながるのではないかと考えた。それでもう一度、メンバーを追加して廻ってみる事にした。

▽『津軽』外ヶ浜ルートを辿ってみる

筆者以外にも教員2名と客員教授1名、学生2名が6月19日朝8時頃、青森駅に集まり一緒に外ヶ浜へ向かった。途中、`マルシェよもぎた`で陸奥湾を

眺めながら休憩をとり、その後、蟹田に向かった。それほど時間的な余裕がなかったので蟹田駅と駅前の市場ウエル蟹はパスして、観欄山に向かった。入口には駐車場がなかったので、そのまま車で山に向かって登ってみると、専用の駐車場があり、そこに車を止めて、太宰治文学碑がある展望台のほうに移動した。ここを前回訪問した時は、あんまり手入れがされてなかったが、今回は誰かが草刈をしていた。軽く挨拶をしたら、草刈をやめてまで積極的に太宰治の文学碑を解説してくださった。この方はなんと外ヶ浜太宰会の会長でいらしゃった。太宰治と友人らが花見の宴を開いた位置、記念碑の岩を今別の海岸からわざわざ運んで来た理由など、大変貴重なお話をいただいた。特に観欄山の文学碑はN君が中学生時代に太宰治と一緒に座り未来を語った岩で、その思い出のために今別から運んで来たという話には驚いた。

その後、平館台場跡を過ぎて赤岩がおいてある今別砂ヶ森、高野崎、鑄釜崎(Igamazaki)を訪れた。この日の天気予報は時々雨と雷雨だったが、外ヶ浜巡りを強行した。ちょうど平館台場跡についた時は大雨だったので、車から降りず、ちょっと立ち寄ったまま通り過ぎた。次のルートは、県指定天然記念物である赤根沢の赤岩だった。赤岩は、貴重な塗料として古くから使われていた事、天然記念物だが管理がされていないことなどについて、同行した竹内先生から説明があった。歴史、文化の資源としていかせる工夫が必要だと感じた。高野崎でランチを食べて、少し周りを散歩した。高野崎には津軽方言詩人である高木恭造の文学碑が建てられている。美しい陸奥湾の景色とは対照的な文学碑の詩の内容が印象的だった。高野崎の近くにある鑄釜崎には、ユニークな展望台、それに負けないくらい突き出た奇岩、壮大なオーシャンビューが我々を待っていた。

次のルートは今別本覚寺。本覚寺は、青銅塔婆などで今別では有名なお寺であり、太宰治がN君の勧めで訪れる場面が、『津軽』に描かれてある。ここを訪れる際に、リアカー行商から鯛を買い、その鯛のことで面白い

エピソードが展開される。鯛をお寺に持って行く場面もそうだが、その日の夜、旅館で鯛の原形の塩焼きを眺めながらお酒を楽しみたかった太宰が、そのままの塩焼きをお願いしたところ、頭も尾もない塩焼きが出て来てがっかりする場面がそうである。本覚寺の後は三厩駅に立ち寄った。三厩は津軽鉄道の終点である。駅の周りを歩いた後、近くにある義経寺に向かった。車を近くの駐車場に止めて、義経寺へ歩き出した時、激しい雨が降り始めた。傘をもっていない人もいたし、なかなか激しい雨だったので、残念だったが義経寺は今度見ることにした。

その後は次のルートである旧奥谷旅館と竜飛崎を訪れた。旧奥谷旅館は、実際太宰とN君が泊まった旅館で、現在は観光案内所になっている。案内所に入っていくと、太宰とN君が宿泊した部屋がそのまま保存されており、当時太宰の食事などが再現されてある。最後には竜飛崎を訪れた。ここは、ご存知のように津軽半島の最北端という地理的な象徴性もあるし、他ではなかなか経験できない荒い風を経験する事もできる場所である。

▽『津軽』外ヶ浜ルートを辿ってみて

『津軽』外ヶ浜ルートを辿ってみて、筆者には二つの可能性が見えてきた。まず、このようなルートがあると、人間太宰治を知る上でもっとも重要なルートになるのではないだろうか。筆者は個人的に太宰治の小説を知りたいなら『人間失格』を、人間太宰治を知りたいなら、『津軽』を読んでみるべきだと思っている。まったく同じことを外ヶ浜太宰会の会長も考えていた。実際、『津軽』には、素直な太宰治の姿が数多く出てくる。特に蟹田から龍飛崎までの旅行には、他の所を旅する時には見る事ができない純粋な彼の姿が描かれてある。これは中学時代の親友であるN君とのやり取りがあるからであろう。時には真面目な、時にはユーモラスな彼の人柄と出会う。観瀾山の太宰治文学碑には「かれは人を喜ばせるのが何よりも好きであった」と刻まれてあるが、N君など知人から見るとこれがもっとも彼を表す言葉であるようだ。



なので、太宰治が知りたい人にとって、『津軽』を読みながら蟹田から龍飛崎までの外ヶ浜ルートを辿って見るのは大変貴重な経験になるに違いない。

次に、この外ヶ浜ルートは地域の自然環境、文化のすばらしさを経験するためにも大変貴重なルートになれる。蟹田から龍飛崎までは多彩な自然と文化を経験する事ができる。陸奥湾という独特なオーシャンビューをずっと楽しめる。ずっと海を眺める事ができるが、観瀾山や義経寺のような小山からも陸奥湾を眺められるし、高野崎や鑄釜崎の展望台からもオーシャンビューを楽しめる。また外ヶ浜の歴史や文化にも触れる事ができる。義経寺、本覚寺など太宰治が紹介して直接訪れた場所も少なくない。それ以外にも太宰治が訪れてない、赤岩、大平山元遺跡など、素晴らしい文化遺跡にも出会える。

このように『津軽』の外ヶ浜ルートは多くの潜在力を持っているが、それほど知られてないし、特に蟹田から龍飛崎までの『津軽』外ヶ浜ルートが明確に開発されていないのは、残念である。また、青森、蟹田、竜飛崎までの距離もかなりあるし、このルートで利用できる公共交通がないのも課題である。そのため、太宰治の『津軽』に出てくる場所を軸に、外ヶ浜の魅力を感じられるルートの可能性について真剣に検討されるべきではないだろうか。このようなルートの開発は青森の文人、太宰治ゆかりの地の巡りと外ヶ浜地域の活性化にもつながるに違いない。

5. 「赤根沢の赤岩」についての聞き取り調査報告 ～地域の遺産の保存と活用のために

SDGs 研究センター・客員教授 竹内 健悟

今別町の砂ヶ森地区に青森県指定の天然記念物「赤根沢の赤岩」がある。指定されたのは昭和30(1955)年1月7日なので、あと3年で指定70周年を迎える。現在、道路脇に大きな赤い岩が置かれ「赤根沢の赤岩」という看板が立っているので(図1)、この岩が天然記念物だと思われがちだが、この地では昔ベンガラ原料になる赤土を採掘していたため、その掘削地30aが天然記念物として指定されている。よく見ると、赤岩の奥に赤色の露頭が見え(図2)、さらに近くと掘った跡のような穴を見ることができる(図3)。

この地の赤土・赤い岩石は、赤の顔料として古くは縄文時代から使われており、この土や岩石を使って着色した土器が宇鉄遺跡、亀ヶ岡遺跡等各地から出土している。

江戸時代の状況については「弘前藩庁日記」等に記録が残されていて、番所や蔵が設置され、奉行や番人が任命されて赤土を掘っていたことなどが書かれている。この地の赤土は大変上質で、江戸城の御宮や日光東照宮の修復に使用されたほか、幕府にときどき献上されている。しかし、天明の飢饉によって廃山となり、その後は採掘されることなく現在にいたっている。この詳細については紀要で報告する予定である。

このように見ると、「赤根沢の赤岩」は「天然」記念物ではあるが、歴史的な価値も持つ地域の遺産とみることができる。しかし、残念ながら江戸時代に赤土が採掘されていたことなど、歴史的な側面はほとんど知られていない。

4月23日、「いまべつを語り継ぐ会」(熊谷範一会長)が実施した歴史講座で、赤根沢の赤土に関する江戸時代の記録を報告した。その結果、会員の方も興味を持ってくださり、地元の方から情報収集をしてみようということになった。

5月13日、砂ヶ森多目的集会施設で「赤根沢の赤岩についての聞き取り調査」が行なわれた。参加は、熊谷会長、齋藤始事務局長など「いまべつを語り継ぐ会」会員が5名、三厩村在住の郷土史家佐々木文武氏、砂ヶ森地区住民が6名、それに私の計13名であった。

調査会では初めに私から江戸時代の赤根沢の赤土採掘の概要について説明した後、事前に提出しておいた20ほどの聞き取り項目について一つずつ検討していった。詳細は別の機会に報告するとして、以下の様な点が判明した。

- ・天然記念物指定にあたっては、歴史的な価値も含まれている。(町教委の回答)
- ・活用の計画は今のところない。
- ・今ある赤岩は奥から移したもので、一時持ち去られたこともある。
- ・赤岩を削り取っていく人がいる。
- ・奥の穴は子どもが入れるくらい広がった。今は土で埋まってしまった。
- ・平成の初め頃までは、雨が降ると赤土が溶けた赤い水が流れることがあった。

その結果、今後次のような活動が必要になると考えられた。

- ・啓発活動…自然としての価値と歴史的な価値の両方を持っていることを知らせる、説明板やリーフレットを作成する。
- ・保存活動…柵の設置や注意を呼びかける看板などで赤岩が傷つかないように守る。

・調査活動・・・関係者へのさらなる聞き取りや、考古学研究の成果や古文書の記録をさらに調べるなどして歴史的な価値を整理する。

以上について、「いまべつを語り継ぐ会」の方々、砂が森地区の方々、青森大学の先生方とともに、これらの活動に取り組んでいきたい。



図 1 赤根沢の赤岩

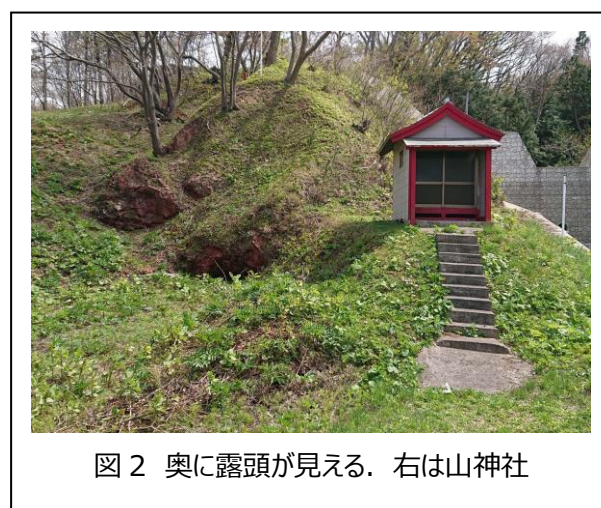


図 2 奥に露頭が見える。右は山神社



図 3 坑道跡と思われる穴



図 4 聞き取り調査の様子

◇総研日誌（2022年4月1日～6月30日）

▽5月25日（水）

・第2回総研運営会議

▽6月5日（日）

・勉強会「食と農の自治組織」を作ろう：オーガニック給食を手がかりに」

▽6月7日（火）

・青森大学自然体験・幼児教育研究会（仮）

▽6月27日（月）

・第3回総研運営会議

※第1回総研運営会議は4月28日、メール開催

◇編集後記

「総研だより」第4巻第1号をお届けします。

コロナ禍は小康状態に向かっている様子ですが、ロシアのウクライナ軍事侵攻は依然、戦闘がやみません。直接的な戦火の脅威に加え、グローバル化のきしみや将来的な不安を反映して、原油、食料、原材料などあらゆるものの価格が上昇しています。

さらに、恒常化した猛暑が6月に始まってしまい、既に最高気温が40℃を超える地域も現れました。電力供給が追いつかず、6月27日に電力供給の余力が

乏しくなるとして、前日の26日に初の「電力需給ひっ迫注意報」が東京電力管内に発令されました。

楽観できる要素があまりない状況ではあります。しかし、本号の「総研だより」をめぐっていただければ、厳しい環境下を生き抜いていく手がかりがいくつも記載されていることにお気づきかと思います。

今シーズンも予想される炎暑に負けず、何とか生き延びましょう…！（素）